

令和 2 年度

小 論 文

10 : 30 ~ 12 : 10

教養学部学校教育学科
一般入学試験

注 意 事 項

1. 合図があるまで、この冊子を開いてはいけません。
2. 解答用紙は 2 枚あります。1 枚は下書きに、1 枚は清書に使いなさい。
提出は 1 枚だけです。
3. 合図があったら、解答用紙の指定欄に受験番号を記入しなさい。
4. 落丁、乱丁、印刷不鮮明、汚れの箇所を見いだした場合はすみやかに
申し出なさい。
5. この冊子は、持ち帰ってさしつかえありません。
6. 試験終了の合図があったら、筆記用具をただちに置いて下さい。

設問 次の文章を読んで、問一と問二に答えなさい。

承認欲求は人間にとって「最強」の欲求である。人は認められることで直接その欲求を満たせるだけでなく、芋づる式に有形無形の報酬を獲得し、関連するさまざまな欲求も充足できる。また承認欲求があるからこそ、尊敬や信頼といった好ましい対人関係も構築できる。まさに、いいことづくめのようである。

ところが、あることをきっかけに、こんどは獲得した報酬や築き上げた人間関係にとられるようになる。しかも、そこから容易に逃れられない。それが「承認欲求の呪縛」である。

「承認欲求の呪縛」に陥るのは日本人も外国人も同じだ。そう思われるかもしれない。はたしてそうだろうか？

たしかに日本人だろうと外国人だろうと、人間には承認欲求がある。しかし、そのあらわれ方には日本人特有の傾向がありそうだ。

わが国は島国であり、昔から人の出入りが比較的少ない。民族的にも欧米などと比べるとはるかに多様性が低い。そのうえ少子化で人口の増加が止まり、経済成長も頭打ちの状態だ。そのため社会が「ゼロサム」、たとえていうと一つのパイの分け前をめぐってみんなで争うような構造になっている。その間にグローバル化が進んだとはいえ、全体としてはゼロサム構造がいちだんと鮮明になっているといえよう。

そして組織のなかでは、いつそうゼロサム構造がはつきりしている。

会社や役所のなかでは部長、課長といった役職の数はかぎられている。そのため、だれかが部長になればほかの人は部長になるチャンスが減る。人事評価も相対評価なので、みんなががんばって成果をあげても、だれかが高い評価を受けるとほかの人は高い評価を受けるチャンスが減る。しかも組織のスリム化、フラット化によって役職ポストそのものが削減される傾向にある。

このようなゼロサム構造のもとでは、だれかが活躍するとほかの人がしわ寄せを受けるので、必然的に「出る杭を打つ」体質の風土になりやすい。したがって自分から挑戦し、成功体験を積む機会が乏しいのである。

では、このようなゼロサム型の組織や社会で成功体験を積み重ねるには、どうすればよいか。

それは周囲との競合を避けることである。閉ざされた組織のなかでも、一人ひとりの目標やキャリアが競合しなければ、他人の足を引っ張る動機は生まれない。組織のなかで出世したい人、専門職を目指す人、ゆとりある生活を送りたい人など、それぞれが自分の道を歩めばよいからだ。

その点、近年盛んに唱えられている「ダイバーシティ」、すなわち性別や国籍、それに経歴、専門、年齢、価値観などが異なる人々を混在させることは、一人ひとりに前向きな挑戦を促し、成功を讃え合う組織風土をつくるうえでも効果があるといえよう。

ダイバーシティには別の効果も期待できる。スポーツの国際大会などを見ると、日本チームは一人が失敗すると将棋倒しのように次々と失敗するケースが多い。それはメンバーが同質的で、濃い空気を共有しているからだと考えられる。逆にメンバーの異質性が高ければ、連鎖的に「承認欲求の呪縛」に陥るのを防げる。^①「空気を読まない」には、そういうメリットもあるのだ。

個人の立場でも実行できる対策は、周囲と同一次元で勝負しないことである。

そのためには現在の職場で目標やキャリアを周囲からずらすという方法もあるが、実際には競合するライバルが少ない職場を選んだ就職、転職するほうが成功するケースが多いようである。

呪縛を解くためのもう一つの力ギは「問題の重要性」を下げることである。

期待に応える自信がないとき、「これしかない」「ここから逃れられない」と思うほどプレッシャーは大きくなる。逆に「ほかにも大事なものがある」「逃げ場がある」と思えばプレッシャーは小さくなる。言い替えるなら、問題を相対化できるかどうかである。そこで、どうすれば問題を相対化できるか考えてみよう。

次のようなエピソードがある。

大相撲で幕内最高優勝四一回(二〇一九年一月現在)を誇る、史上最強といってもよい大横綱の白鵬^{はくほう}。その白鵬も数年前、大鵬が持っていた三二回の優勝記録を前にしたときは大きなプレッシャーを感じていた。そのとき白鵬は、彼が尊敬する王貞治ソフトバンクホークス会長から三二回と考えるのではなく、三五回、四〇回と考えたら楽になる」と助言されたそうだ。それが心の支えに

なり、余裕をもって自分の相撲が取れるようになったという。

このエピソードが物語るように、目の前の目標よりはるか先に目標を置くことによって、目の前の目標を相対化すればよい。おそらく王会長自身、現役時代には手が届かないほど大きな目標を抱き、それを追求することで結果的に通算八六八本塁打という金字塔を打ち立てたのだろう。

これは勉強や仕事、そのほか日常生活にも通じる話である。

大学受験などに直面すると、だれでもプレッシャーを感じる。とくに周囲の期待が大きい場合はなおさらだ。そして「絶対に合格しなければならぬ」と意識すれば、ますますプレッシャーが大きくなる。逆に、偉大な科学者になるとか、理想の会社をつくるといった将来の夢を持てば、そこへ到る道筋は一つではないことがわかってくるし、受験だって何度でもチャレンジすればよいという大きな気持ちになれる。すると結果的に受験のプレッシャーは軽くなる。

「大きな夢を持って」とか「大志を抱け」という言葉がこれだけ世間に流布しているのには、このような理由もあるのではないか。

ところで、前述した白鵬のエピソードのなかには、もう一つ注目したい点がある。それは、白鵬が不安な心境を王会長に吐露したと思われるところだ。マスコミに対しても彼は、自分がプレッシャーと戦っていることを正直に語っていた。こうして自分の弱みを見せることによって周囲の期待を下げられるし、失敗したときに体面を保つこともできる。「白鵬も人間だ」とわかってもらえるからである。

このように自己開示には期待の重荷を下ろし、「承認欲求の呪縛」を解く効果がある。自己開示が心理的な負担を取り除くための第一歩だといわれるのもそのためだ。

自己開示は、自分の弱みも包み隠さず見せることである。そして逆説的にいうと、弱みを見せれば恐れを抱かなくてもよいので強くなる。その意味でも大切なのが「失敗体験」である。

スポーツでも他の勝負事でも、まさかと思われていた人が負けることがある。しかも一度にとどまらず、二度、三度と負け続ける場合がある。後のインタビューで、そのとき精神的に追いつめられていたと知り、驚かされることが少なくない。

勝ち続けている人に対して周囲の期待は当然大きくなる。ときには「不敗神話」まで生まれる。一方、本人には「いつか負けるのではないか」という不安が募りだす。しかも負けた経験が乏しいので、負けたときのふるまい方を知らないし、自分がどうなるかわからないという恐怖もある。それが自分を追い込んでしまい、さらなる敗北につながりかねない。また敗北から立ち直る術も身につけていないので、すっかり自信を喪失してしまうことがある。

教育の世界でも人材育成においても、これまで「成功体験」の大切さばかりが強調されてきた。たしかに自信をつけるのに成功体験は大切だが、一方で「失敗体験」を積んでおくことも必要である。そのためにはいくら実力がついて、失敗するリスクをとまなう高い目標にチャレンジし続ける姿勢を忘れてはいけない。

出典 太田 肇『承認欲求』の呪縛（二〇一九年 新潮社）を一部改変した。

問一 「承認欲求の呪縛」に陥るのを防ぐには、傍線①「空気を読まない」が良いと筆者は述べています。ここでいう「空気を読まない」とはどのようなことですか。課題文中の言葉を使いながら二〇〇字以内で説明しなさい。

問二 傍線②「失敗体験」を積んでおくことも必要である」と筆者は述べていますが、あなたはどうか考えますか。課題文を踏まえ、見聞や体験をもとに八〇〇字以内で述べなさい。